愛着の内的作業モデルが大域・局所処理に及ぼす影響

—否定的気分による情報処理の変化—

○井上咲菜¹・大浦真一¹・松尾和弥¹・福井義一²

(¹甲南大学大学院人文科学研究科・²甲南大学文学部)

キーワード：大域・局所処理, 内的作業モデル, 否定的気分

Effects of internal working models of attachment on global/local processing:

Changes in information processing by negative mood

Sakina INOUE¹, Shin-ichi OURA¹, Kazuya MATSUO¹, and Yoshikazu FUKUI²

(¹Graduate School of Konan University, ²Konan University)

Key Words: global/local processing, internal working models, negative mood

目 的

愛着の内的作業モデル（以下 IWM）は、自己と他者に対する認知的枠組みであり、関係不安と関係回避の二次元から構成されている。IWM の安定度によって情報処理のあり方は異なっており、例えば関係不安が高い人は、否定的な情報の処理が速くなることが知られている（島, 2009）。

ところで、我々の周囲にある刺激の多くは大域と局所の階層構造を持っており、それぞれに対する注意を適宜切り替えて情報を処理する必要がある（大橋他, 2001）。関係不安が高いと、微細な刺激から脅威を読み取ってしまう（Mikulincer et al., 2007）ことから、IWM がこの大域・局所処理に対しても影響を及ぼす可能性がある。

一方、大域・局所処理に影響を及ぼす既知の要因として否定的気分が知られており、否定的気分にある者は、大域より局所を見る傾向が強い（村上, 2010）。さらに、関係回避が高い者は、動画によって脅威を与えられることで否定的気分が誘導された場合に、情報処理が遅れることも報告されている（戸田他, 2013）。同様に、IWM が大域・部分処理に及ぼす効果も、通常の状態と否定的な気分状態では異なる可能性があるため、本研究において検討した。

方 法

協力者：大学生 65 名を対象に実験を実施し、欠損値や外れ値を除いた平均年齢 18.94 歳（SD = 1.27）の 50 名（男性 9 名、女性 41 名）のデータを分析に用いた。協力者は、無作為に否定的気分誘導群（23 名）と統制群（27 名）に振り分けられた。**尺度構成：**IWM について、ECR-RS（古村他, 2016）を用いて測定し、関係不安と関係回避得点を得た。

気分誘導：否定的気分の誘導のために、戦争による家族の別離を描いたミュージック・ビデオを視聴させた。その間、統制群は別室で待機させた。なお、気分誘導の操作チェックには、日本語版 PANAS（佐藤他, 2001）のネガティブ情動（NA）得点を用いた。

大域・局所処理の測定：複合数字抹消検査（行場他, 2001；以下 CDCT）を用いた。CDCT は、局所数字によって大域数字を構成する複合数字 720 問からなる。大域数字が抹消対象である場合を G%，局所数字が抹消対象である場合を L%，大域数字を連続して抹消する場合を GG%，局所数字を連続して抹消する場合を LL%，大域数字の次の局所数字が抹消対象である場合を GL%，局所数字の次の大域数字が抹消対象である場合を LG%，大域数字の 1 つ前が抹消対象ではない場合を sG%，局所数字の 1 つ前が抹消対象ではない場合を sL% として、それぞれ正答率を算出した。

結 果

気分誘導の操作チェックのため、否定的気分を従属変数とした条件×測定時期の二要因分散分析を行った結果、交互作用のみが有意であった（ $F(1, 48) = 18.31, p < .001$ ）。単純主効果の検定の結果、誘導群においてのみ測定時期の主効果が有

意であり（ $F(1, 22) = 12.01, p < .01$ ）、誘導前より後の否定的気分が有意に高かったが、統制群では有意差はなかった。

次に、IWM と否定的気分が大域・局所処理に及ぼす影響を検討するため、性別を統制変数、角変換した CDCT の各正答率を従属変数、気分誘導の有無、関係不安・回避およびそれぞれの交互作用項を独立変数とした重回帰分析を行った。その結果、気分誘導の L（ $\beta = .36, p < .05$ ）、GG（ $\beta = .28, p < .10$ ）、GL（ $\beta = .34, p < .05$ ）、sL（ $\beta = .33, p < .05$ ）に対する正の影響が有意または有意傾向であったのに対して、IWM の 2 つの下位次元の主効果は有意ではなかった。また、GL に対する関係不安×関係回避の交互作用が有意傾向であった。単純傾斜の検定の結果、関係回避が低い場合においてのみ、関係不安の正の影響が有意であった（ $\beta = .29, p < .05$ ）。一方、関係不安を調整変数とした際の関係回避の影響は有意でなかった。交互作用の結果を Figure 1 に図示した。

Figure 1 正答率と関係不安・関係回避の交互作用

考 察

本研究の結果、関係不安が大域・局所処理に与える効果が予測されたが、そうした影響の違いは見られず、局所への注意や大域への注意持続を強めたのは否定的気分のみであった。

また、大域から局所への注意の切り替えにのみ IWM の交互作用が見られたが、否定的気分の誘導によって IWM の効果に変化は見られなかった。関係不安が高く関係回避が低い「とらわれ」型が、大域から局所への注意の切り替えにおいて最も正確であった。関係不安が高い人は、そもそも否定的な気分にあるとされ（澤村他, 2013）、本研究でも関係不安と否定的気分には正の相関がみられた（ $r = .52, p < .01$ ）。つまり、関係不安が高い人は、気分誘導の有無に関わらず、元々否定的気分が高かったため、IWM の効果に否定的気分の影響が生じなかった可能性がある。

関係不安が高いと脅威となる刺激に対して選択的に注意を向けやすく（金政, 2005）、関係回避が高いと情報処理が抑制される（島他, 2012）と示されている。ゆえに、関係不安が高く関係回避が低い「とらわれ」型は、局所へ選択的注意が活性化され、情報処理が抑制されなかったため、局所へ注意を切り替える認知機能が高かったのかもしれない。